




---

 卷 頭 言
 

---

## 企業と大学の研究について

大 野 豊\*

少し前のことになるが、ある計算機関係の雑誌に、あるメーカーの方が次のような意味のことを書いておられた。ソフトウェアの開発に関しては、日本の大学は計算機のユーザにすぎず、計算機を作る側の研究をやってくれない。アメリカの大学ではこの方面の研究を大いにやっているのだから、大変うらやましい。そのようなアメリカに対して、日本のメーカーはいわば孤軍奮闘中である、と。わが国で計算機の研究がはじまった頃はたしかに大学もメーカーも同じ問題意識をもち、それぞれの研究は相補的な役割りを果たしていたといえよう。筆者が在職していた国鉄でさえもその意識は変らなかった。

計算機の考え方や技術が発達して、メーカーとユーザそして大学などの研究者と分化して行くにつれて互いの関心のあり方が疎遠になった、ということもあるいはあるであろう。しかしながら、筆者の国鉄在職中ではシステム開発というのっぴきならぬ問題に直面して、ユーザの立場とはいえ、メーカーの考えることもよくわかり、同じような問題意識をもっているつもりでいたわけである。おそらく実務の分野では、ユーザもメーカーも立場は異なっても、現在その意識し解決したい問題はそう大きなずれはないように見うけられる。

数年前から大学の人間となってから、大学の様子がわかるにつれて計算機の分野での大学の研究者の関心のあり方は、どうも実務の側と大変ずれているのではないか、と思うようになった。その例としてデータベースやソフトウェア工学をあげればよいであろう。これらの分野はいずれも実務側が先行し、わが国の大学の研究者の関心はおくれてはしまったというべきであろう。ある人は大学の先生は計算機をたのしんでいる、といったが、これは大学の実情をよく表わし裏がえせば大変な皮肉でもある。筆者はかつて本学会の「情報処理」の編集にたずさわり、現在も新しい欧文誌の編集を担当しているが、しばしば聞かされる批判は、学会誌は面白くない、役に立たない、ということ

であり、主として大学での研究が実務の側の需要から遊離している、という意味がこめられている。

わが国の計算機の分野は、これからの国の主な支柱の一つであり、国際競走に勝って行かなくてはならない、とするならば、本文の冒頭のような嘆きが当然でてくる。そして、その改善は勿論大学側が大半負わなければならない所であるが、現在のわが国の大学の事情を考えると、それだけでは問題は解決しないといえよう。今まで高度生長と追いつき追いつき越せて、何が何でもつくり上げるということをして、メーカーはじめ実務側ではやってきた。そのプロジェクトは、時、人、金そして技術（あるいは知恵不足）の束縛のもとに走ってきた。その間に技術者たちは、いろいろ研究し、解決すべき問題の所在を意識しながら、そのままに放置し、プロジェクトが終了するとその大部分は忘れ去り、そして次のプロジェクトへと向って行かざるを得なかった。

技術の進歩は問題の存在を意識し、それを整理して明確な研究課題としてとりあげて行くところにあるといつてよい。整理されないプロジェクトの問題は、その参加者の経験として積み重ねるだけで、いつまでも工学や科学にはなっていない。結局、外国でやっているからそれをまねよう、ということに落ちてしまう。

このように書いてくると、実際面から遊離しない問題の所存をつきとめ、解決して行くため、実務側でも考うべきことは多いことがわかる。

わが国の大学は計算機の分野でそれなりの研究に力をそそいでいるが、現在おかれている諸条件を考えると、急に多くをのぞむのは無理であろう。とはいっても情報工学や科学の特性からみて、ややもすると、大学の研究が実際面から果てしなく離れて行ってしまうことも大いにありうるので、大学自らの勉強もさることながら、実務面からの不断の有効なコミュニケーションが必要と思われる。（昭和52年6月21日）

\* 本会副会長 京都大学工学部教授